

## 鉄砲趣味

胡成才君が訳したブロークの『十二人』は近ごろ喜んで読んだ本である。本文の辺幅はもともと多くはないけれども。わたしはこの詩の中に少し大革命の気味を嗅ぎつけた、ほんの僅かだけだが、というのはわたしの感覚はこのように鈍、いや、まるで少し麻痺していて、文学について何の刺激も根っから感じないのである。しかし第十一節の一行はとともわたしを感動させた。その文に云う。

“彼らの鉄砲は……”

この五文字はまるで呪文のようにわたしの眼光を吸付け、わたしの心中に一つの欲望を起こさせた、何とかして一丁鉄砲を手に入れたいと、ちょうど可哀想な小さい“音楽士ヤンコ”がボロヴァイオリンを欲しがったと同じように。おお、鉄砲！なんと愛すべき名前だろう。たとい単なる名前にしても。

あまりわたしを知らない人は、よくわたしはトルストイヤン (Tolstoyan) だと思っているが、これは実はそれほどでもない。トルストイはむろんわたしも好きだが、まだ“ヤン”になるほどではない。しかも戦争についてという点になると、わたしの意見はもっと違う、というのはわたしは戦争を承認するからだ。わたしは決して戦争を提唱しないが、それが一種逃れられない事実であることを認めざるを得ない。ちょうど我々が死を認めるように。これがわたしが鉄砲に対して反感を抱かない、そしてなおいささか眷恋の情を抱いているわけである。しかし、鉄砲は好きだが、決して全部がその実用にあるのではない、わたしは実は鉄砲そのものが好きなので、なかなかよい玩具として見ることができるのだ。あの燐光のように青光りする銃身、ほんとうに日々向かい合って撫でさすっても飽きない。“天下太平”の時には、百戦錬磨の古い鉄砲を手に入れ、(ピストルの類は好きではない、) 書齋の壁にかけ、わたし自身が拓した永明の造像と並べ、わたしの鳳凰三年の磚と同じく珍重したいと思う。玩具としてだから、弾はなくとも構わないが、むろんあればなおよい。“天下太平”と言ったが、太平でなければ古い銃刀など買えないし、また壁にかけた玩具を見ながら長閑な日を過ごせるはずもないからである。しかしながらわたしの鉄砲に対する愛着は変わらない。わたしが女人と子どもを愛好するように。南京で兵隊をしていた頃、五年ほど鉄砲を弄ったことがあり、それがこの嗜好を育てた。兵隊というものがならざるべからざることがわかる。

(民国十五年九月)

※初出：1926年9月25日『語絲』第98期